

6 音 楽 科

登 浩二・福田 秀範

1 「豊かな感性を育む」音楽学習を振り返っての成果と問題点

音楽科では、子どもたちがさまざまな表現及び鑑賞の活動を通して豊かな音楽体験を積み重ね、音楽のよさや美しさに触れながら、心豊かに生きていくことのできる資質や能力を身につけていく教育の充実を目指している。このような教育を実現していくには、新しい学力観に立った授業を創造し展開していくことが強く求められている。すなわち、教える側から学ぶ側に立った授業への転換を図り、子ども一人ひとりが進んで自分のよさや可能性を発揮しながらよりよい音楽を求め、主体的で創造的な表現及び鑑賞の活動を進めることができるよう、子ども一人ひとりの立場に立つ授業の工夫・改善を図る必要がある。

その具体として音楽科では、子ども自身の心で感じることを音楽教育の出発点であると捉え、自ら感じ・気づき・考え・表現していくといった4段階の学習ステップを包含した題材設定を行い研究を継続してきた。その成果として授業や音楽朝会などで伸び伸びと明るい子ども、すなわち自分が思ったことや感じたことを、素直に表現しようとする子どもが増えてきたように感じられる。それは例えば、東雲音楽隊への参加希望者の確実な増加や、社会教育団体としての児童合唱団等への参加率（平成5年度0名→平成9年度15名）の増加などからも感じられることである。これは、おそらく音楽を通して自分自身をなんとか表現したい、あるいは自分のもっているものを音楽的表現を通してみんなに認めてもらいたいという現れの一つと考える。

しかしその一方、授業そのものに焦点を当ててみると、各学年を通して、ある問題あるいは課題についてどう考えたらよいかについて、教師が道筋を示し「こんな方法で、こうやってみたら」というかなり具体的な指示がないと、なかなか自分たちでは動き出そうとしないといった一面も共通して見られる。また、学習過程においても何か粘り強さが感じられにくく、もう少し突っ込めばおもしろくなるのにあきらめが早く「この程度でいいや」「そこそこ楽しければいいや」といった割り切りが、子どもたちの学習姿勢から感じられることも少なくない。これは、一人ひとりのよさを伸ばす以前に、ごく常識的な意味での学習の基礎（取り組みの姿勢・根気）ができていないのではないかという危機感すら持たせる。

結局、学年が上がるに従って音楽の学習について何となく切実感を感じなくなってきたのではあるまいかという問題点が浮かび上がってきた。

2 なぜいま自立が必要なのか

これまでの本校における「めあて追究」の一連の研究から「学習に対する切実感」の問題は幾度も取り上げられ、その成果は初等教育誌でも発表されてきた。それらを要約すると、子ども自身が「こうしたい」「ああしたい」と切実感をもって学習するためには、まず学校や家庭の生活の中で切実感に結びつくようなものがなくてはならない。特に学校の中では、子ども達自身で学習の問題を解いていく過程や、生活の中で見つけた課題をよりよく実現するような取り組み方について、自分たちで考えるようにしたり追究したりする時間的なゆとりを用意しなくてはならないというまとめ方もできるであろう。このことを音楽の学習にあてはめてみると、次のような問題点が考えられる。これまで、この題材にはとても心をひかれるものがあるからもう少しやってみたいという欲求があったとしても、題材全体の進行や他の学級との兼ね合い、また研究会や教育実習などの学校行事

などいろいろな条件によってそれらがなかなかできないで、結果的には与えられた条件の中でしか動けない。それらが繰り返されることにより「この程度で」という安易な妥協が教師の中にも、子どもの中にも培養されていったのではあるまいかという点である。

この問題は、音楽科のみならず他の教科においても共通して挙げられる問題である。ということは、現行の教育課程そのものが今、そしてこれからの教育に対応していくことに困難な部分が生じて来ているのではあるまいか。そのため、本校では各教科の内容を精選し合い、各教科で基礎基本の徹底を、そして総合学習で児童一人ひとりの興味関心に応じてそれらを発展させて行くことをねらった新教育課程創造の試みを始めたところである。それでは、これからの音楽科における基礎基本とは何なのかについてこれより考えて行きたい。

3 自立へ向かう子どもたち

音楽科における基礎基本を考えることは「なぜ音楽の学習をしなくてはならないのか」という原点を問うことでもある。そして、豊かな現代社会において音楽そのものの価値観が多様化し、いわゆる教育音楽が何か子ども達の日常生活にあふれている音楽と比較して、異質なものと変容していることも考慮する必要がある。しかし、基本は直接的に音楽を教えるのではなく、音楽活動を通して「なんて音楽っていいんだろう」といった感動を育み、生涯を通じて音楽を楽しんでいける確かなものを培っていくことにある。それを、表現と鑑賞との一体の扱いの中で同時に目指して行くことが重要であろう。そのためには、楽器の奏法や歌い方、作曲家や曲の背景、楽曲のしくみなど、知識技能と呼ばれる部分についても関心を高め音楽を深く知ることにも必要となってくる。

すなわち子どもたちが自分たちの生活から、音楽に対する課題意識を高め、それがまた自分たちの生活に戻っていくような学習のパターンを設定することにより、音楽に対する憧れを深めるような題材設定の工夫を行う必要がある。そして、子どもたちがしっかりと「自分なりの音楽観」（私はこういう音楽が好きなんだ・こういう音が好きなんだというこだわり）をもつことが自立の一つの具体像ではないかと考える。続いて、そのための具体的方法について考えていきたい。

4 子どもの側に立つ学習指導の設計（自分で決める場を大切に）

(1) 自分のよさを生かし、よりよい音や音楽を求める心を育む

世界中のどの民族も固有の音楽をもっており、そのルーツをたどると自然発生的に音楽は生まれ他の文化と密接な関係を深めながら、今日へと発展して来ている。音楽とは何かを考える時、それは人間の生活そのものであるとも言える。例えば胎児に音楽を聴かせエコーでその反応を調べるとベートーベンの交響曲第9番第4楽章の「歓喜の歌」の合唱ではほぼ8割の胎児が激しく手足を動かさせリズムに反応し、逆にサン・サーンスの「動物の謝肉祭」第13組曲の白鳥では9割近い胎児が動きを止め静かになるという音楽心理学の実験結果もある。これは、古生代まだ人間が水中生物であった時代から受け継がれて来た遺伝子構造に起因するものではないかといわれている。とすれば、子どもたちが音楽に対して潜在的に持っているであろうあこがれを尊重し、学習に積極的に生かしていくことが重要になってくる。それはすなわち、教師の関わり方の問題である。音楽を単に教える対象として捉えていないかについて常に振り返り指導の改善に努めるとともに、教師自身が音楽を楽しみ子どもとともに成長していく姿勢を大切に授業を進めたい。

(2) 子どもの感じ方や考え方が生きる学習活動の推進

音楽活動にたいする喜びは、子どもの素直な感じ方や思いが土台とされている授業から生まれる。すなわち、子どもたちが自分の感じ方や考え方、思いや願いをもとにして学習対象への関わり方あるいは、対象そのものを自分なりにつくっていくような学習活動の創造が求められる。

しかし、自分の感じ方や考え方を表現するためには、自分が感じたことや考えたことが学習対象

への働きかけのために有効なのか、そうでないのか判断する手掛かりが必要となってくる。「何でもいいから、思ったことや感じたことを発表してみましょう」という教師の発問に子どもたちが沈黙してしまう光景を時々見かけるが、これなどは判断する手掛かりを教師が与えていないから、発表したい・表現したいという意欲は子どもたちにあってもそれが生かせずにいる典型であろう。また、そうした発問をする教師の側も、学習のポイントがあいまいになっていることが多いものである。例えば、「この時間は歌詞の表す情景をたっぷりとイメージさせたい、そしてそのイメージを曲想表現の工夫につなげたい」という学習のポイントが明確に教師にあるとすれば「今の歌い方、どんな雲だったかなあ。録音したみんなの歌を聴いてみようね」「お天気によっていろいろな雲が空に出るけれども、この3拍子の感じはどんな雲を表しているのかなあ」など子どもたちに判断する手掛かりを与えることにより学習のポイントが明確化され、子どもの感じ方や考え方が生きる学習活動の深まりが期待できる。さらに、こうしたポイントを絞った学習を継続することにより、自分の音楽活動をふりかえる視点が生まれ、自分のよさについて気づくことができたりよりよい音楽を自ら求めて行く姿勢が形成されて行くのではないかと考える。

そのために、教師は一人一人が何を身につけて行けばよいかについて、明確な理念や意識を持っておくことが重要であるし、「子どもたちは音楽の授業を通して喜びを感じているか」「子どもたちは授業を通して音楽を好きになり、楽しいと感じているか」の2点について日々の授業を通じて絶えず振り返り指導の改善に努める必要がある。

5 今後の課題（子どもの主体的な学習活動充実の視点）

(1) 自分のよさを生かし、音楽とのかかわりを深める学習活動の充実を図る。

① 本物に触れ、よりよい音や音楽を求める心を育む

音楽に対して潜在的にもっているであろう「憧れ」(それは子どもの可能性とも結び付いている)を尊重し、学習に生かして行く。

② 子どもの感じ方や考え方を生かす学習活動の工夫

音楽活動に対する喜びは、子どもの素直な感じ方や思いが土台とされている授業から生まれる。すなわち、子どもたちが自分の感じ方や考え方、思いや願いをもとにして、学習対象へのかかわり方、あるいは対象そのものを作って行くような学習活動が求められる。

③ 主体的に活動できる時間と場を設定するために教育課程の見直しを継続する。すなわち、題材構成の工夫を行うと同時に、教材の厳選を総合学習との関連に留意しながら継続する。

(2) 音楽とのかかわりを深める学習の過程を授業展開に位置づける。

① 音や音楽、音楽の楽しみ方など様々な学習対象へ積極的に働きかけ関心を深める。

② 直接体験を通して、自らの課題や問題を発見し、学習のねらいを明かにする。

③ 課題や問題の解決・実現へ向けて、創意工夫を深めて行く。

④ 互いの表現や行動を認め分かち合い、自分たち共通のものをつくりあげる。

⑤ つくりあげた音や音楽をともに楽しみ、学習活動の経験を生活に活用する。

(3) 自分で決める場を大切に学習活動充実の視点

① 自分たちの追求活動を継続して行い、音楽的な成就感や満足感を得るようにする。

② 友達や教師と協力して学習活動を展開できるようにする。

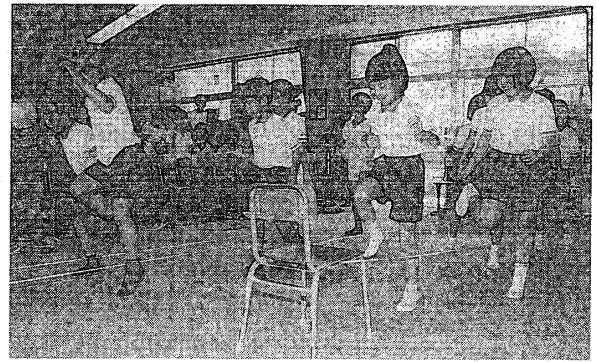
③ 子どもたちが自分のよさや学習状況に気づき、常に新鮮な目標を持てるようにする。

④ 子どもとともに学び、音楽を自ら楽しむようなかかわり方を教師が持つようにする。

【音楽科の学習から】



《1年生の学習より・くじらぐもにのって》



《3年生の学習より・イルカはざんぶらこ》



《4年生の学習より・夕やけ雲》



《複式中学年の学習より・耳をすませば》



《5年生の学習より・キリマンジャロ》



《複式高学年の学習より・風を切って》

【12月音楽朝会（毎月1回実施）より】

